

令和7年度 あきた総合科学技術会議 議事概要

1 開会

2 あいさつ

産業労働部 小笠原次長より開会のあいさつ

3 議事

事務局より、出席者の報告、配布資料について確認。ここからの進行は、尾野会長にお願いする。

尾野会長：審議内容は議事録として県のウェブサイトに掲載され、その際に発言者名を秘匿する必要はないと思われるので公開で行いたいがいかが。【承認】

(1) 取組事例等報告

尾野会長：本日は「あきた科学技術振興ビジョン2.0」推進機関である秋田県立大学、秋田大学、秋田工業高等専門学校、秋田県農業試験場から報告いただく。

①大学改革の方向性

尾野会長：はじめに秋田県立大学の蒔田理事兼副学長に「大学改革の方向性」について報告をお願いする。

蒔田委員：資料2-1により説明

尾野会長：新設される大学院（学環）の定員規模はどの程度か。

蒔田委員：既存の前期課程の入学定員に加え、新たに学環として20名の定員増となる。大学院志望者は定員より多く、増加傾向にありカバーできる見込みである。学環の学生は、両研究科の課程を横断的に学ぶことになるので、それだけ優秀な学生が来てほしい。

尾野会長：18歳人口の減少下で大学の定員を満たすことが難しくなる可能性が高い。大学の規模感を保つには大学院進学を増やすことが重要であり、学環設置の流れになったのではないかと。秋田大学でも医理工連携というものがあり、先進ヘルスケア工学院を作った。今後融合的な研究が増えていくので、学環設置の流れは自然であると思う。

本郷委員：当社（アスター）では、地域企業とのセッションということで、県立大の学生と年に1回交流している。企業にとって大学は人材供給源だが、県立大は県外出身者が多く、県外出身者の県内企業への就職がほぼない。地域の発展のために、大きな産業を育てれば地域に人は残る。優秀な人材を外に出さないように、地域産業と連携して受け皿を作るとともに、大学の研究開発の中で人材を県内に定着させる取り組みを真剣に行うべきではないか。

蒔田委員：ご指摘の通り、特に大学院修了者の県内定着率は低い。解決には大学と企業の相互理解が必要であり、企業課題に学生が取り組む「キャップストーンプログラム」などを通じて、学生が県内企業を知る機会を作っている。

本郷委員：学校側がより偏差値の高い学校や大企業への進路指導を意識するあまり、地域に残す視点

が県全体の取組として不足しているように感じる。

尾野会長：危機意識は共有している。高学歴になるほど県内企業の採用が慎重になる現状もあるため、採用環境の整備も含め、お互いに高めていく必要がある。また、秋田県も力を入れていると思うが、アントレプレナーシップ教育により地域課題解決型の起業を促す動きも出ている。

②航空機システム電動化の研究開発について

尾野会長：続いて、秋田大学電動化システム共同研究センターの榊センター長に「航空機システム電動化の研究開発について」報告をお願いする。

榊センター長：資料 2-2 により説明

本郷委員：当社（アスター）は米国大手企業と連携し、航空機用部品供給を行っているが、秋田からの輸出が止まれば相手企業が困るほど重要な位置を占めている。こうしたグローバルな事業に参加できるような人材供給・人材創出をお願いしたい。

尾野会長：旧種平小学校を活用したこの取り組みは夢があり、実現可能だと感じている。産学官一体となって、2030 年代には秋田のモーターで飛行機を飛ばすという夢を実現させてほしい。

榊センター長：自身も秋田出身であり、戻ってきてこのような事業ができることを嬉しく思う。引き続き支援をお願いしたい。

③来年度以降の構想について 学科再編による活性化と人材育成の一層の強化

尾野会長：続いて、秋田工業高等専門学校の高橋校長に「来年度以降の構想について」報告をお願いする。

高橋委員：資料 2-3 により説明

齋藤博子委員：県外出身学生が 25%に増えているとのことだが、秋田高専の魅力はどこにあるのか。

高橋委員：ホームページ等で「県外の方大歓迎」と明確に発信し、地元以外の学生も受け入れる姿勢が浸透してきたことが大きい。また、教育内容を GX と DX に絞り、特色を出そうとしている。

柴田委員：大学や高専間の交流や単位互換の状況はどうか。

高橋委員：秋田大学と協定を結び、高専学生による総合環境理工学部の実験室見学などを始めているほか、来年度は県立大学のモンゴル派遣プログラムに高専学生も参加させる計画がある。

柴田委員：県内企業へのインターンシップは就職のきっかけになるが、現状はどうなっているか。県外に行ってしまう学生が多いと思っている。

寺境委員：秋田大学では、インターンシップは宿の問題があるので、県内で参加するか、自分の出生地域で参加することが多いと思う。

蒔田委員：県立大では、単位化しているインターンシップがあるが、それは基本的に県内が中心である。県内インターンシップについては学校からリストを提示して推奨しているが、県外の企業や試験研究機関については学生が自主的に探すケースが多い。

寺境委員：秋田大学でも同じ状況である。県立大でも同様に県内はリスト提示、県外は自主応募が多い。近年は短期の早期インターンシップが採用に直結することが増えており、以前の就業体験型とは性質が変わってきていると感じる。

齊藤民一委員：一度県外に出て経験を積んで戻ってくる人材は非常に優秀であるため、そうした人材

に入ってもらうためにも県内企業も積極的に自社の取組を情報発信していく必要がある。大学や高専にもそうした視点での指導もお願いしたい。

④秋田米を牽引する水稻品種「サキホコレ」の開発

尾野会長：続いて、秋田県農業試験場の川本場長に「秋田米を牽引する水稻品種『サキホコレ』の開発」について報告をお願いします。

川本場長：資料 2-4 により説明

本郷委員：私自身も米作りをしている。高温対策として水管理などを工夫しているが、気温が 30 度を超えると従来のいもち病などは出にくくなる感覚がある。「サキホコレ」における病害対策はどうなっているか。

川本場長：開発過程で従来の病害抵抗性選抜は行っており、「サキホコレ」については病害抵抗性も十分兼ね備えている。高温になるといもち病はどちらかといえば押さえられるが、紋枯病やごま葉枯病など高温性の病気が増えるリスクがあるため、注意が必要である。

尾野会長：資料の写真を見て、ナノテラスを思い浮かべた。ナノテラスで見るとどうなるか、個人的に見てみたいと思った。

眞田委員：食味試験で使用している炊飯器はどのようなものか。高い方が良いのか。

川本場長：食味ランキングで「特 A」を取ることが目標の一つであるため、穀物検定協会で使用している機種の情報参考に購入した。ただし、研究用としては炊飯器の性能が良すぎるとどれも美味しくなってしまうので選別がしにくくなるため、研究機関によっては、昔からのガス釜を使っているところもある。

4 その他（意見交換など）

尾野会長：他に報告事項や情報提供、また会議全体を通して意見等あれば、お願いします。

【発言なし】

尾野会長：全ての議事を終了したので、進行を事務局にお渡しする。

5 閉会

事務局：多数のご意見を賜り、また会長には長時間にわたり議長を務めていただき、感謝申し上げます。以上で、本日の会議を終了する。